
彼女の隣は渡さない！

七度

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の隣は渡さない！

【Nコード】

N63280

【作者名】

七度

【あらすじ】

学校中の誰もが知っている美少女、日浅陽菜——の友人であるあたし。

この物語は、彼女に近づく虫（男）をあたしが殺虫スプレーを持って追い払う、そんなお話。……で、あってるのよね、これ？

彼女の朝

朝一番にあたしが学校に来てすることと言えば、友人の靴箱を開けることだ。

あついや、変な意味はないんですよ？上履きに画びょうを入れてやるうとか、上履きを隠してしまおうとか、そんなひどいことは考えていません。

あたしが何故そんなことをするかというと――……

「……やっぱりあった」

友人のシミ一つない上履きの上に置かれたいくつかの封筒。ピンク色だったり水色だったり花の模様があたり可愛いクマのイラストが描かれていたり。

あたしはそれを手に取って、周囲に人がいないか確認する。よし、いない問題ない、まずは一枚目だ。

薄桃色の封筒に貼られた桜の花弁の形をしたシールを爪でかりかりと引っ掻き、跡が残らないようにそつと剥がす。その途端にふわりと甘い香りがした。くそう、気取ったことしやがって。丁寧に折られた便箋を取り出し内容を確認する。まあ、確認しなくてもわかってるんだけどね。

『好きです。ずっと前から見てました。付き合ってください。』

はっはーん、やっぱりな。ラブレターか、甘酸っぱい青春の代名詞『靴箱にラブレター』か。テクノロジーが発展しインターネットが爆発的に普及している日本でこんな古臭い方法で愛を伝える人たちがいるなんて、モテモテの友人に出会うまであたしは知らなかった。

知りたくなかったけどさ。

その後もカラフルな恋文の文字を追いながら、改めて友人『日浅陽菜』のモテっぷりを思い知る。

彼女を知らない人間はこの学園にいない。大きな瞳、長いまつ毛、柔らかな髪、白い肌、桃色の唇。何もかもが完璧だ。あたしは今まで生きてきて、こんな可憐な子に出会ったことがない。小柄なのに胸は意外と大きく、もし自分が男だったらその胸に顔を埋めてぱふぱふしたいと変態的なことを考えてしまう。いかん、落ち着かなくては。

とにかく、陽菜はモテるのだ。そして毎日のように下駄箱にはラブレターが入れられている。まあそれは別に構わないけど、一つだけ許せないことがあった。

他の愛の手紙とは違う真っ黒な手紙。差出人の名前は無い。できれば開けたくないけれど、この手の封筒を先に見つけるためにあたしは早起きして学校に来ている。手でびりびりと封を切り、真っ黒の便箋を目の前に広げた。

「…はあ」

久しぶりに発見した嫌がらせの手紙。内容は『死』だとか『殺』だとかそんな漢字が使われた物騒なものだ。あたしはそれをぐしゃつと丸め、近くのごみ箱の中に放り込む。

…朝から最悪の気分。でもこれを陽菜に見せないで済んだと思うとホッとした。

陽菜は自分の容姿の良さを自覚していない。

だから美貌を自慢するような嫌な性格をしていないのだが、それを好意的に取る女子もいれば、悪く受け取る女子もいた。陽菜を嫌っ

ている女子に好きな人がいて、そいつが陽菜を好きになつたりすれば、どんなことが起こるか安易に想像できる。わかりやすい嫌がらせは無いが、地味で陰湿な嫌がらせが多い。その一つが手紙だ。今日は文字だけだった、ひどい時にはカミソリとか針がいっぱい刺さった人形とかが入っている。陽菜が初めてそれを見た時、彼女は「平気だよ」と笑っていたが、その顔は今にも泣きそうだった。陽菜のそんな顔は二度と見たくない。

それからあたしは目覚ましを5時にセットして、生徒たちが学校に来るまでに彼女の靴箱をチェックしている。大抵手紙は、前日の放課後に入れられているようだ。確認後は陽菜が来るまで新たな手紙がやってこないように見張っている。はたから見るとすつごく不審な女だろうけど、陽菜のためなら我慢できた。

「あ、まゆちゃん。おはよう！」

聞く者を虜にするような愛らしい声がして後ろへ振り向くと、予想した通りの人物が立っていた。

「陽菜！」

あぁっ…あたしの大切な友人は朝から可愛い。可愛すぎる！少し寝ぐせの残った髪も、眠そうに目元を擦る姿も、何もかもが眩しすぎて直視できない！いや、もったいないからする。直視しちゃう！今日も君は美少女だね陽菜ちゃん！

「ん？どうかした？」

自分の名前を呼んで黙ってしまったあたしを心配して、陽菜はそろりとしちらに手を伸ばした。ピンク色の爪に、荒れていない白く小さな手。もし自分が男だったらその手を掴んでべろべろと舐め回したいと変態的なことを考えてしまう。いかん、落ち着かなくては。

「おはよ。今日も陽菜はカワイイなーって考えてた」

「ふふっ…お世辞でも嬉しいよ。ありがとう」

お世辞じゃないのになー、と言っても陽菜は信じないけどね。

陽菜はあたしの隣を通り過ぎ、自分の下駄箱に手を掛ける。もちろんその中には元に戻しておいたラブレターたちが「読んで！読んで！」と甘く囁きながら、彼女の手で取り出されるのを待っていた。

「あっ手紙…」

何枚かの内の一つをほっそりとした綺麗な手で取って、陽菜は困ったような笑みを浮かべる。

「…どうして私なんかいいんだろう？」

それはですね、あなたがこの世で一番可愛くて、性格良くて、完璧な美少女だからですよ…って言いたい！すごく叫びたい。我慢するけどさ。

「うーん、陽菜が好かれるような存在だからじゃない？」

ぼんやりと暈すように、自分の思いを伝えてみる。だけど陽菜は一瞬きょとんとして、にこりと笑った。ああ、だめだ。たぶん伝わってない。

「まゆちゃんは、そう思ってくれてるの？なんだか嬉しいな…」

あたしだけじゃないよ！みんな思ってるよ！そんなあたしの心の声も知らないで、陽菜はとても幸せそうだ。…ん、…幸せ…そうだ…？

微笑んではいるけれどいつもよりその笑顔は曇っていた。心はどこか別の所にあるようで、じわじわと顔に怒りが広がっている。何か変なスイッチを押してしまったか？ああ、でも怒ってる陽菜も可愛いよ！もし自分が男だったらお（以下略）

「どうかした？」

内心でれしながら、あたしは心配そうに目の前の美少女に声をかけた。だって心配なのは本当だし、怒った顔も可愛いけれど陽菜

には笑顔が一番似合う。

「聞いてよ！まゆちゃん！」

愚痴モードに突入した彼女を「教室で話そうか」と半ば引きずるように移動させる。人が増えてきた生徒玄関はゆっくり話ができるような場所ではない。それにチラチラと陽菜の方を見る男子生徒たちが鬱陶しくてこれ以上ここにいたくなかった。

「で、何を聞いてほしいの？」

陽菜の前の席に腰を下ろしながら、あたしは欠伸を噛み殺す。慣れたとはいえやっぱり5時起きは辛い。特に昨日は、数学の課題を1時過ぎまで必死にやっていて睡眠時間は4時間ぐらいだ。ベッドに入っても眠れなくて羊を数えたりなんかしていたから、実際はもっと短いだろう。

「あのね、朝男の人とぶつかったの！」

勢いよく喋り始める陽菜に、うんうんと頷いてあたしは先を促す。

「曲がり角だったんだけど、塀があつて男の人がいることに気がつканくて……」

それは危ない。今度から陽菜と行動するときには、常に人の気配を気にして歩かなければ。と、そこまで考えて昔読んだ少女漫画を思い出した。……今時ないだろうけど、一応念のためだ。

「……あのさー、ぶつかった時って食パン食べてた？」

遅刻すると慌て、食パンをくわえたまま走る少女。そして曲がり角で男性とぶつかり、そこからスタートする甘く切ない恋。そんなベタな恋愛話はとくに卒業しているが、何故だか嫌な予感した。

「やだなー、食パンなんか食べてないよ」
よかった…そうだよ、ね、食事しながら学校に来るなんて陽菜はしないよ、ね。

「だって私ロールパン派だもん。ぶつかっただけ落しちゃってさ…
もったいなかったなあ」

「げほっぐほっ！」
思わずむせたあたしをどうか許してほしい。だって、ロールパンを
食べながら登校する陽菜を想像しちゃったんだもん。うはー見たか
った。

いやいやいやいや…って違うよ！今はそんなことより…

「……で、その後どうしたの？」
「うん、『ごめんなさい』って謝っただけだね、その人私のこと
をちらっと見て、『少しは周りを気にしろ、バカ女』って言って去
って行ったの！ひどいと思わない？あっちも私に気がつかないで走
ってきたのに！」

うわぁ…何て返せばいいんだろう。とにかく、このベタな恋愛イベ
ントから陽菜を遠ざけなければならぬ。その男と会うことはもう
無いだろうから、大丈夫だと思うけど。

「そんな奴のことは忘れなよ。考えたってイライラするだけでしょ
？」

「……そうだね」

よし、話を別の方向へ持っていくぞ！

「朝あたしに声かけてきたときは普通だったよね、何で急に思い出したの？」

今まで怒っていた彼女はそれを引っ込めて、途端に悲しそうな顔をした。あれ、また変なスイッチ押しちゃった？

「まゆちゃんさ、私に『好かれるような存在』って言うてくれたでしょ？でも、朝ぶつかった時のこと思い出して、そうでもないかなーって。だって初対面の相手に『バカ女』って言われたんだよ。確かに周りとか気にしてなかったし……本当バカだよ、私」

やめて、お願いだからそんな顔して笑わないで。あたしは自分の胸の奥がぎゅっと締めつけられるのを感じた。くそう、陽菜にぶつかった最低男、会ったら絶対ぶん殴ってやる！

「その男のことなんて知らないけど、陽菜はバカじゃないし、あたしは陽菜のこと大好きだよ」

だから、いつものように笑って。あたしの『好き』でどうにかなるなんて思ってないけど。

「……まゆちゃん」

驚いたようにこちらを見て、陽菜の表情がぱつと明るくなる。彼女は、あたしの右手をそっと握って笑った。そう、あたしが見たかったのはこの顔なんだよ！

「まゆちゃん、ありがとう。私のことを好きだと言ってってくれるように、私もまゆちゃんが大好きだから………きゃ、血っ血があ！」

陽菜が突然椅子から立ち上がって慌てだす。唇に滴る何かを感じて触れてみると液体がべとりと手についた。あれー？赤いぞこの鼻水？えーと鼻水じゃないのか。陽菜も叫んでたし血かなあ、これ。あたしは陽菜のように取り乱すこともなく、ポケットからティッシュを掴んで血を拭き取った。いやあ、陽菜に大好きとか言われて嬉しすぎて鼻血出ちゃったよ。

「大丈夫、佐藤？」

不意に横から声がしてそちらへ視線をやると、日焼けした端正な顔立ちの男があたしを見下ろしていた。

佐藤って名字はこのクラスであたししかない。つまり今の言葉はあたしに向けられたもの。

「森口くん、まゆちゃんから血が！」

あたしのために慌てる陽菜はとっても可愛いんだけど、新たに現れた男を涙目で見つめるのはやめて欲しい。自分の涙目（プラス上目づかい）がどれだけ他人の心をメロメロにするか知らないんだよ陽菜は。とりあえず、彼女を落ち着かせなければ。

「心配ないよ、ちよつと暑かったただけだから」

「でも、保健室に行ったほうが」

「心配ないよ、朝食にチョコを山盛り食べてきたただけだから」

「そ、そうなの？」

普通は信じないだろうねこんな言い訳。今はそんな暑い時期でもないし、朝から大量のチョコレートを食べられるほどあたしの胃は強くない。だけど、彼女なら信じてくれるはず。

「気をつけてね？まゆちゃんに何かあつたら私……」

「うん。気にしてくれてありがとね」

よし、信じた！

あたしは内心ガッツポーズを決め、血のついたティッシュを教室の隅のごみ箱に投げ込んだ。ひゅううううう…すぽっ。汚れたちり紙は綺麗な弧を描いて黒いプラスチック製の箱に吸い込まれていく。

…やったね！今日は何か良いことがありそうな気がする！

しかし、そんな気分も隣に立つ男の存在を思い出した瞬間苦いものに変わった。

「…森口、あんた何でまだいるの？」

あたしのことを『佐藤』と呼んだ男——森口 春樹は、先程と同じ位置から動いていない。鼻血事件は解決したし、自分の席に戻ればいいのに。

「ひどいなあ、佐藤は。日浅もそう思うだろ？」

「陽菜に話をふらないで、近寄らないで」

「そこまで言わなくてもいいのに」

ははっと白い歯を見せて森口は笑う。

あたしはこの男が大っ嫌いだ。

だって、イケメンなんだもの。

光を透かして茶色く見える髪とか、運動部に所属しているため日焼けした健康的な肌とか、

爽やかな笑みとか、一々気に障る。

RPGとかにいたら、ジョブは騎士ナイトかと、どうでもいいことを考えているけど、この男を嫌う一番の理由は——…

「ところで、日浅…今日も手紙は入ってた？」

「え、……うん」

手紙とは、もちろんラブレターのことである。

「返事はどうするつもり？」

「断るよ。好きでもないのに付き合うなんて、やっぱり相手にも失礼だしね」

「……そっか」

森口がほっとした表情で少し笑ったのを、あたしは見逃さなかった。

そう、森口 春樹は陽菜の事が好きなのだ。

2人が一緒に歩く姿は、美男・美女カップルにしか見えないし、少数の女子からは目の保養として喜ばれている。あたしは認めないけどな！

陽菜には幸せな恋をしてもらいたいと思っているし（だから靴箱のラブレターを捨てるようなことはしない）、彼女に心から愛せる人が現れますようにと願っている。だが、隣にあたし以外の誰かがいてそいつと幸せそうにしているところを想像するとやり場のない怒りが込み上げるのだ。

相反する思いを抱えたあたし。どうにかしようとは思っただが、どうにもならないのだから仕方がない。

「ねえ、森口」

「ん、どうかした？」

だから、あたしは陽菜に近づく男たちの邪魔をする。それでめげるような男は陽菜に相応しくない。邪魔をされて、それでも一途に彼女を愛するなら、少しだけ認めてあげてもいいけどね。

「ラブレター出したヤツの方が、告白もしないでダラダラした関係が続けてるあんたより、ずっとカッコイイよね」

立ち上がって奴の耳元で囁けば、森口はびしりと固まった。

ざまあみろ。いつもさわやかな空気を振りまきやがって、女子をむやみやたらと惚れさせやがって、この男が好きな女なんてたくさんいるだろうし、その中の一人と付き合えばよかったのに、なんで陽菜なんだよ！……あたしも男だったら陽菜に惚れてると思うけど。

「どうかしたの？ 森口くん、まゆちゃん？」

「ううん、なんでもないよ」

席から離れ森口の隣に移動したあたしと動かなくなった森口を見て、陽菜は首を傾げて聞いてきた。その拍子に彼女の柔らかな髪が肩からずりと滑り落ちる。あたし生まれ変わるなら陽菜の髪がいいな。だつてずっと傍にいられるし、毎晩念入りに手入れされてそうだし。今年の七夕は短冊にそれを書いてみるか。

変態的な願い事を悟られぬように別の話題を探していると、ガラツと戸を開ける音がして担任が教室に入ってくる。あれ、もうホームルームの時間なのか。周囲に目をやると、いつの間にか集まったクラスメイトたちによって教室は賑わっていた。

「あ、先生来たから自分の席に戻るね」

陽菜にそれだけ言っただけで教室を横切り目的の机へ向かう。あたしの席は廊下側の一番後ろで、陽菜の席は窓際が一番後ろだ。くそう、どうしてこんなにも離れているんだ。くじ引きの神様はあたしに何か恨みでもあるのか！

「おーい、みんな静かにしろ」

担任の言葉で生徒たちはお喋りをやめ、静寂が教室を満たす。

「知っている奴もいると思うが、今日我がクラスに新メンバーが加わる」

その一言でクラスは騒がしくなった。「どんな子だろうね」と隣の友人と話す女子もいれば、「俺は聞いてたぜ、転校生のこと」と自慢げに仲間と話す男子もいる。

その様子をばけーっと眺めながら、あたしは全く違うことを考えていた。先程まで陽菜の前の椅子に座っていたが、どうやらそこは森口の席だったらしい。あたしがいたから移動しなかったのか。まあ、どうでもいいけどね。

それよりも、転校生と聞いて朝の出来事を思い出す。陽菜がぶつかったと言っていた男。その男が転校生で、陽菜と運命の再会！…とかだったら面白いのにね。現実には起これば間違いなく面白くないことになるのであたしの妄想の中だけで再会させてあげよう。

「お前らも早く会いたいだろうし、入ってもらおうか。」

担任が視線を入口の戸に向ける。どうやら「転校生」が登場するらしい。ざわめいていた教室は再び静かになり、全員が同じ場所に注目していた。

「……うわあ」

最初に声を発したのは誰だろうか。とにかく、そいつの漏らした言葉を耳に捉えた瞬間に部屋はお祭り騒ぎになった。きゃーかっこいい！だの、うおー女じゃなかった！だの、女子の喜びと男子の嘆きが教室いっぱいになる。

それもそうだろう。現れた転校生はとんでもない美形だったのだから。

陽菜はどんな反応を示しているだろうと窓際を見れば、彼女は目を見開いて転校生を凝視していた。そしてがたりと大きな音を響かせて立ち上がる。

何故だか嫌な予感がした。少し前にも感じたなこれ。

「あ、あなたは！」

その声で陽菜に気がついた転校生は、その美しい瞳に彼女を映しながら口を開いた。

「お、お前は！」

同時に2人は叫んでいた。それはもう学校中に聞こえるんじゃないかってほど大きな声で。

「朝ぶつかった失礼な男！」

「朝ぶつかったトロい女！」

どうやら面白くないことになりそうだ。

目の前の運命の再会を喜べないあたしは、『運命』ってやつはどうすれば殴れるのだろうと、そんな無駄なことばかりを考えていた。

彼女の朝（後書き）

もう一つの連載小説「恋愛ゲーム」の主人公がモテモテ（？）なので、こっちはモテない主人公です。ジャンルは恋愛ですが（恋愛をメインで書くつもりなので）、主人公が恋愛しないなんて認めない！って方がいればどうにかします。

話を書くときに、これは男性向けか女性向けか悩んだのですが、結論として『変な女の子を見守りたい人向け』になりました。

「恋愛ゲーム」の息抜きなので、更新はゆっくりです。

彼女と転校生1

『だってえ、しょうがないじゃないですか！。2人は出会った運命だったんですから……グベボツ！！』

真つ黒で人型をしたそれは、『運命』と書かれた紙をセロハンテープで頭部つばいところに貼り付けていた。

あたしはその『運命』をひたすら殴り続ける。

『いだっ……やめて、…グブツ！！』

ひたすら殴り続ける。

『ブガツ！！！……ごめんなさっ…ごめんなさい！！』
ひたすら殴り続けた。

意味が無い、ということは分かっている。それでもあたしの怒りは抑えられない。

何故、陽菜とぶつかった男が転校してくるのか。何故、その男は美形なのか。何故、偶然陽菜の隣の席が空いていて男がそこに座ることになるのか。ああっ…イライラする！

『運命』か『偶然』か、この際どっちでもいいや。あたしには怒りを叩きつけるサンドバックが必要だった。

『ッフ…グハッ！……痛いっ……』

「ん」

『ベフっ……許して！！』

「さん」

『う…うへえ！！』

「……とうさん」

は？父さん？

一瞬父を呼ぶ声に邪魔されるが、あたしは『運命』を殴り続けた。もつと痛がつて苦しめばいい！！あたしが受けた精神的ダメージはそれよりも酷いのだから。

『だからって、暴力はダメ…グバァッ！！！！』

「———とうさん」

『痛い痛い痛い！！！！』

「———さとうさん」

サトウサン？誰だそれ？

あ、あたしの名前か。

妄想という名の自分の世界で『運命』を勝手に作り暴力を振るっていたあたしは、そこから意識を浮上させて教室にある自分の身体へと戻ってくる。

怒りを内で発散させること（“内”で“発散”って矛盾だよなあ）に夢中になりすぎて、今は1時限目の英語の時間であることをすっかり忘れていた。

「…佐藤さん？わたしの話を聞いていましたか？」

40過ぎの女教師が眉間にしわを寄せて、あたしを睨みつけている。怖いよお…そんな顔しなくなっただけなのに。美人が台無しだよって言ったら許してくれないかな。

「聞いていませんでした。すみません」

とりあえず謝罪だ。世の中、頭を下げておけばどうにかなることが多い。

「……あなたは後で職員室に来なさい。天海君、13ページから読んでください」

ああ、課題とか渡されるのかな、と憂鬱に沈んだあたしの耳に伝わってきたのは、朗々と英文を読む男子生徒の声。

天海君、と呼ばれたそいつは今朝あたしたちのクラスに加わった転校生だ。

艶やかな黒髪と美しい面立ちは、平平凡凡な顔が大勢集まるこのクラスでは浮いていた。

陽菜と森口も綺麗な部類の人間だが、出会ってから一年以上経ってその「綺麗」は教室にすっかり馴染んでいる。馴染んだからといって、陽菜が最高に可愛いことに変わりはないんだけど。

それにしても、本当に陽菜は可愛いなあ。

陽菜の前の席に座る森口って男と、陽菜の隣の席に座る天海って男が今すぐ消滅してくれたら、窓際で真剣に授業を受けているあの子をずっと眺めてられるのに。

今はしない。だって、美形が陽菜の近くにいるだけで何故かイライラするから。

面白くもない英語の教科書に視線を戻すが、こんなのやってられないなと感じたので、あたしは自分の欲望に従うことにした。要するに、眠ることにした。ぐう。

そんなこんなで、1日が終わり、放課後である。

「終わった……終わったよ！」

自分の席に座ったまま、あたしはぐっと伸びをして、解放感に浸っていた。

勉強はあまり好きではない。

それでも毎日学校へ来てしまうのは陽菜がいるからだろう。恐るべき陽菜の吸引力。

「あ、まゆちゃん。おつかれさま！」

天使だ！天使が、あたしの机の傍で微笑んでいるぞ！
疲れきっているあたしにとって、これ以上の癒しはない。というか
疲れていない時でも見ていたい。

「おつかれさま、陽菜。帰ろうか？今日バイトでしょ？」
席から立ち上がり教室から出て行こうとするあたし。しかし、天使
は無視できない一言でそんなあたしを停止させた。

「まゆちゃん、英語の先生のところ行かなくていいの？」

忘れてたあああああ！！！！
すっかり頭からぶっ飛んでいた。

後で職員室に来なさいと言われたので、すぐじゃなくてもいいかな
ーと先延ばしにしたのは良くなかった。今から職員室に行けば、バ
イトへ向かう陽菜と一緒に帰れなくなってしまう。嫌がらずにさっ
さと休み時間に終わらせれば、こんなことにならずに済んだのに！

「あ、ははははは、大丈夫だよ！『後で』って言ってたし、明日で
もいいよ、きつと！」

「え、でも……」

「平気、平気！じゃあ行こうか、バイトに遅れても困るし」

「で、でもね、まゆちゃん……」

少し強張った表情で、陽菜の視線はすっと教室の外に移動した。
あたしも視線の先を追うように、首をぐいんと動かして——見
てしまう。

「あら、佐藤さん。なかなか来ないから心配してたのよ。じゃあ行きましょつか——職員室へ」

絶対に心配なんかしてないだろうと言い返したくなるような、無表情で立っている英語教師を。

「ごめん。あたし職員室行ってくるよ」

それ以外に何を言えばよかったのか。

だって怖かったんですもの。この先生から殺気を感じたんですもの。それ以外に何を言えと？

「うん、わかった……またね、まゆちゃん」

マイプリティエンジェルは、本当に心配そうにあたしを見ながら教室を出て行った。口だけで心配していたこの先生とは大違いだ。さすが陽菜、どんな時だって優しさを忘れない。

「佐藤さん」

「……はい」

まだ教室に残っていたクラスメイトに見送られながら、あたしは職員室に続く道をゆつくりと歩き始めた。

地獄に向かう罪人の気分——と、言えば大げさだろうか。

それとも、陽菜と引き離される様はロミオとジュリエット？——いや、さすがにこれは違うな。

放課後の緩んだ空気の中で、生徒たちは部活に汗を流し、友人たちと親交を深め、あたしのことなんかこれっぽっちも気にしてくれない。

羨ましいな楽しそうだな、と思うたびに現在の自分の状況と比べ、溜め息を吐いてしまう。くそう、あたしだって本当は今頃、陽菜とキャッキャウフフ言いながら共に下校していたはずなんだ！

それなのに、どうして……どうして！

「佐藤さん？」

はい、そうですね。あたしが悪いんですよ。わかっていますとも。

前を歩いていた英語教師が突然振り返り、あたしの文句はしゆるしゆると引っ込んだ。この人に反抗するのは危険な気がする。ただの勘だけど。

「どうぞ、入って」

「……失礼します」

あたしたちがやってきたのは、職員室の中から入れる小部屋だった。狭い室内に革張りのソファと立派な机が置いてあるせいで、余計狭く見える。もう少し家具のサイズ考えればいいのに。そんなことを思いながら後ろ手でドアを閉めると、ぎいという何とも嫌な音がした。

先生とあたしが向かい合うように座って、暫しの沈黙。

これは、あたしから話しかけた方がいいのか？

英語の授業まともに聞いてなくてすみませんって。しかもそのあと全てを諦めて、寝てしまいました、すみませんって。

「あのね、佐藤さん」

深刻そうな顔で英語教師はようやく口を開いた。何だ、あたしからじゃないのか。

「授業に集中できていないようだけれど、大丈夫なの？何か心配ごとでもあるの？」

「！！」

びっくりだ。

まさかそんなことを言われるとは思っていなかったので、衝撃は大きかった。

だって、厳しい先生なんだよ？

授業中に答えられない問題があつたらプリント10枚は必ず渡されるし、わからない問題は何度も何度も説明されるし、補習の時間も理解できるまで帰らせてくれないし、——あれ？よく考えてみれば、教育熱心な良い先生だよな。この人。

「2年生もそろそろ慣れてきたはずだけど、だからこそその悩みもあるんじゃない？」

「……先生！」

先程までの気持ちはどこかに吹っ飛んで、あたしはキラキラした瞳で先生を見つめ返す。

怖いだけの先生だと思っててごめんなさい。これからは少しでも注意も素直に受け入れます。

「大丈夫です！ただ寝不足だけで、悩みなんてありません！」
元気よく言ってから、「あ、そういえば今日悩みの種が増えたんだっ」と思いだした。

転校生天海はどうやらあたしの敵になりそうだし、早急に対策を練

らなければならぬ。

しかし、英語教師にそんなことを打ち明けてもしかたないし、黙ってしよう。と、いつか早く帰りたい。陽菜に会いたい。

「ならいいんだけど、無理はだめよ？」

はい。わかっておりますとも。ありがとうございます。今後あなたのことは『おかん』と心の中で呼ばせてもらいます。

「先生がこんなに素晴らしい方だとは知りませんでした！ 自分のクラスの生徒でもないあたしをこんなに気にしてくれるなんて！」
「そ、そうかしら？」

よしよし。嬉しそうだな。

褒められて悪い気分になる人間は少ないだろう。このまま先生を持ち上げて、さっさと帰ってやる。

「先生のような教育熱心な方がいらっしやれば、どんな生徒でも真面目になりますよ！ 他の先生方は先生を見習うべきです！」

「まあ、佐藤さん……」

「先生は先生になる定めだったので！ あなた以上に教師に相応しい人物なんていないのですから！」

「そ、そんな……」

先生、先生、言いすぎて訳が分からなくなってきたな。

「で、先生は、えーと、先生？ 先生のお名前って何でしたっけ？」

瞬間、それまで頬を赤く染めて照れていた英語教師（40代）の表情が歪んだ。そして、とても冷たい空気を発しながら、地獄の底か

ら響くような低い声であたしを呼ぶ。

「佐藤さん？」

ハイ、ナンデショウカ？

「1年の時から英語を教えているというのに、あなたって人は！！」

そこから説教はしばらく続いた。

授業態度とか宿題をやってこないとか、日ごろの先生の不満をぐちぐちと延々聞かされ、終わったのは6時過ぎだった。

いや、良い先生なんだよ。良い先生だけどな。

結局、名前わからないや。

●
●
●
●
●

学校からそう遠くない位置にあるケーキ屋さん『あまみ』。

ケーキを購入すれば、コーヒー紅茶飲み放題の喫茶スペースが利用可能なことから、放課後は学生で賑わっている。

甘い物好きの女子が多く訪れるのはもちろんだが、1年前からは男

の客も増えたらしい。

その原因である日浅　陽菜は、いつものように店先を掃除しようと手にはほうきとちりとりを持ち、道行く人に笑顔を振りまいていた。「いらっしやいませ！」

店に入ろうとするカップルにニコリと笑うと、彼氏の方が顔をでれつとにやけさせて隣の彼女に叩かれる。これはケーキ屋『あまみ』ではよく見かける光景だった。

「あいかわらず、モテモテねえ。ヒナちゃんは」

ぽん、と軽く背中を押され振り返る。

後ろに立っていたのは、茶色の長い髪を後ろで纏めて白いフリルのついたエプロンを着た若い女性——『ケーキ屋『あまみ』の店長だ。

「かおるさん、何かご用ですか？」

「モテモテはスルーですか。……まあいいや、ちょっと来てくれる？ 紹介したい子がいるから」

その言葉に陽菜が首を傾げると、「掃除はあとでいいから」と手を掴まれ引つ張られる。強引な彼女の行動には慣れているので、大人しく一緒に店の中に入った。

水色で統一された店内は、全てが店長であるかおるの趣味だ。

入ってすぐ目につくショーケースには、色とりどりのケーキが並べられ、まるで宝石のよう。楽しそうに商品を選ぶ客を眺める暇もなく、奥の厨房へ連れて行かれる陽菜。

そこで出会ったのは——

「今日から働くことになった、天海 冬馬くん。イケメンでしょ？
名字でわかると思うけど、店長の甥っ子だから！ 仲良くしてあげ
てね」

むすっとした表情でこちらを見ようとしてもしない男には覚えがある。

朝、曲がり角でぶつかり、失礼な言葉を吐いて去った男。
そして、何故か陽菜のクラスに転校してきた男。

「もう、黙ってないでちゃんと自己紹介しなさい！」
かおるに言われて、嫌そうにしながらも天海は口を開く。

「……よろしく」
「愛想が悪いわね……あ、このミラクル美少女が、ヒナちゃんよ。
うちの看板娘だから」

かおるに肩を抱かれ、自分も挨拶を返さねばと、陽菜は頭を下げた。

朝の出来事やらなんやらで、彼に対して良いイメージを持っていないが、かおるにそれを言うわけにもいかない。

できるだけ関わらないでおこうと、陽菜はそそくさと厨房を出て行った。

●
●
●
●
●

先生と言う名の鬼から解放され、癒しを求めて向かったケーキ屋さんで、あたしは会いたくない人物に会った。

「……モーリーグーチャー、なあにをしているのかな？」

喫茶スペースで優雅に紅茶を飲んでいる男の隣に、どさつと腰を下ろす。

びっくりしたようにあたしを見て、そいつは当然のようにこう答えた。

「何って、紅茶とケーキを楽しんでいるんだけど」

「そんなこと聞いたらんわ！」

張り倒したくなるような爽やかな笑みを浮かべる森口 春樹に、思わずあたしは怒鳴っていた。ふざけてんのか、それともあたしを馬鹿にしてんのか？ああ？

「どうせ、陽菜に会いに来たんでしょうが。そうじゃなきゃ甘い物が苦手なあんたが、こんな所に来るはずない」

「……どうしてオレが甘い物が苦手って知ってるの？」

「あたしの情報収集力をなめんじゃないわよ」

癒されたくて訪れた店でこんな不愉快な気分を味わうとは、今日は厄日に違いない。

ああ、あたしの天使はどこだ！？この荒んだ心をどうにかして！

店内を見回し、目的の人物を発見。

周囲の目も気にせず手を振りながら、あたしは大声で叫んでいた。

「ひーなー!!!」

淡い水色のワンピースと、白いフリル付きエプロン姿の陽菜は、まるで不思議の国から飛び出したアリス。邪魔にならないように耳の上で結ばれたツインテールや、短いスカートから覗く太ももが、あたしの心の穢れを浄化していく。生きててよかった。

「いらっしやいませ、まゆちゃん。元気そうでよかったよ」

「うん、落ち込んでたけど、陽菜のおかげで元気になった。ありがとうね」

「そう？ よくわからないけどそう言ってくれて嬉しいな」

陽菜さん最高のスマイルありがとうございます!!
あたしは本当に幸せ者ですね。あなたの笑顔を一人占めできるなんて。

と、思ったのも束の間、隣で森口が顔を赤くして陽菜を見つめているのに気がついてしまった。くそう、今のはお前に微笑んだんじゃないぞ。

ムカつく気持ちを抑えるように、「あまみのチャレンジスペシャルパフェ」と、無理矢理作った笑顔で陽菜に注文する。あたしだって何も頼まず喫茶スペースで寛ぐつもりはない。

「ご注文ありがとうございます。少々お待ち下さい」

陽菜はぴよこんと可愛らしくお辞儀をし、腰の位置で結ばれたりボンを揺らしながら厨房へ消えた。ああ可愛い。後姿だけであんなに可愛いなんてきつと世界で陽菜だけだろう。

「失礼いたします、ご注文のケーキをお持ちしました」

イライラしているあたしの耳に届いたのは、近くのテーブルにケーキを運んできた店員の声。どこかで聞いたことのあるような、その声の主は。

艶やかな黒髪と美しい面立ちの男は、顔に笑みを貼り付け接客をしていた。

朝、陽菜とぶつかり、転校生としてクラスに加わり、ケーキ屋『あまみ』でバイトしている。これは偶然なんて言葉で終わらせてしまつていいのだろうか。

あたしは現実——天海 冬馬から逃れるように、テーブルに突っ伏した。

彼女と転校生1（後書き）

『彼女と転校生』またの名を『あたしと英語教師』

彼女と転校生2

あたしのクラスに新しくやってきた天海　冬馬は、腹の立つほど綺麗な顔をしている。

美形だ。誰もが振り向く素晴らしい美形だ。その涼しげな瞳に見つめられた者が、「ああ！とろけちゃう！」と床の上に倒れそうになったり、「おやめくさいませえ！」と廊下へ飛び出していたり、とんでもない反応をしてしまうほどの顔である。嘘ではない。何故ならこれらの光景をあたしは教室で嫌というほど見てしまったからはつきり言おう。

お前らバカだろ。

何が「とろけちゃう！」だよ。

人の視線によって溶けてしまったら大事件ではないか。というかありえない。

まあ、彼女たちがそんな意味で言っているのではないとわかるけど、イラつくあたしは現実的なツツコミしか思い浮かばない。いいかげんにしろ。綺麗なものが見たいなら陽菜にしろ。いや、やっぱりやめて。見ないであたしのだから。そう思った瞬間、自嘲気味な笑みをもらしてしまう。

あたしは本当に自己中心的だ。

陽菜のためとかいうか大体が自分のためだ。そう、『陽菜が大好きな自分』のため。

今までそれで困ったことはない。しかし、彼女をこんなに大事にしていなければ、些細なことで心が乱される必要もないのに、とは思

う。例えば陽菜に恋をしている男の存在とか。

「ん、どうかした？ 佐藤？」

そう、例えばこいつだ。

あたしの左隣に座る森口 春樹は不思議そうな表情であたしを覗きこんでいた。

近い近い近い、顔が近い。

本命の陽菜にはこういうことはしないで、何とも思っていない女子には無意識で優しくしたり近寄れたりするのだからこの男は恐ろしい。数日前にも、廊下で気分悪そうにしている女子をお姫様だっこして保健室に連れて行くのを見た。やらねーだろ、普通。

「森口には関係ない」

椅子ごとずずずと後ろに下がり、森口から離れる。ああ、やだやだ。

長いまつ毛と、吸いこまれてしまいそうな茶色の瞳、端正な顔を至近距離で見ってしまったことを思い出し、どきりとあたしの胸が高鳴る——わけもなく。はいはいイケメンですね、それがどうしたんですか、イケメンだからって陽菜は渡しませんよ、とさらにイライラしただけである。

「……何で離れるの？」

「いや、何となく」

あたしは手に持ったお冷を、にぎにぎしながら注文したパフェが届くのを待つ。

陽菜と森口の会話を邪魔するためにここに座っただけで、こいつとのお喋りを楽しむ気は一切ない。金払ってでもあたしと喋りたい、とかだったら別だけど。

それにしても飲み物が冷ってちよつと空しい。

森口は優雅に紅茶なんて飲んでいるが、これはケーキを購入した者へのサービスだ。あたしが注文したのはパフェで、それも普通のパフェではない。

『あまみのチャレンジスペシャルパフェ』

これの見た目の説明はたった一言。

「デカイ」、それだけだ。

その名の通り、チャレンジ精神がある者でないと頼まないパフェである。通常のパフェの3倍の大きさで、それを1人で1時間以内に食べなければならぬ。時間内に食べればタダ、食べきれなければ3680円を請求される。ちなみに途中退席は認められていない。

何故、あたしがこんなものを頼むのか、答えは簡単——お金が無いからだ。

陽菜と違ってバイトもしてないし、お小遣いだってそんなに貰えるわけじゃない。それでも陽菜に会いたいあたしが考えたのが、『あまみのチャレンジスペシャルパフェ』だった。買物もしない客が喫茶スペースで寛ぐわけにはいかない。それならばタダで食べられるこいつを注文すればいい、となつたのだが、最初の頃はかなり苦労した。

甘い物はそんなに嫌いでもないし、大丈夫だろうと思つたあたしが甘かつたのだ。

生クリームだらけのプリティな外見とは裏腹に中身は大変凶悪で、あたしは1回目の挑戦で3680円を失つた。あれは中々に苦い記憶だ。精神的にも金銭的にもダメージを受けた。2回目も3回目も4回目も、あたしは甘つたるいパフェに負け続け、呼び名はパフェからいつのまにか『悪魔』に変わり、もしかして普通にケーキ注文

したほうが安く済むんじゃない？ と考え始めた頃だ。奇跡は起きた。そう、5回目の挑戦であたしヤツを完食したのだ。勝因は昼食を抜いたことと、学校からケーキ屋『あまみ』まで重い荷物を持って疾走したことだろうか。とにかくあたしは勝ったのだ、あのくそ甘い悪魔に。

「お待たせいたしました、『あまみのチャレンジスペシャルパフェ』でございます！」

注文の品を運んできたのは陽菜ではなく、他のバイトの女の子でもなく、この店の主である、かおるさんだった。見た目は20代前半の女性。しかし実年齢はもっと上らしい。どちらかといえば美人の部類に入る顔が、年齢の話になると、一瞬にして般若に早変わりだ。

「いらつしやいマユミちゃん。今日もヒナちゃんのストーカー？」
「人聞きの悪いこと言わないでください。友人のバイト先に来ただけですよ」

「えーでも、ヒナちゃんがいるときは絶対店に来るよね。これストーカーじゃないなら何て言うの？」
「愛です」

あたしははつきりとその言葉を口にして、テーブルに置かれたスプーンを手取る。パフェがやってきたのだから無駄話をしないで早く食べたい。だって溶けて液体になったアイスクリームなんて美味しくないよね。

できれば1時間そばで見守る役目は陽菜にやってほしいけど、かおるさんが運んできたとうことは彼女が見届け人か。

「きゃあー！！ 聞いた？ ハルキくん！ 愛だって、愛。青春ね、ドキドキするわね！」

「そうですね」

テンションの高いかおるさんに話しかけられ、森口も少し戸惑っている。ハルキって誰だ、などとちょっと考えてしまったがそういえばこいつの名前は森口春樹だ。データとしては頭にあるものの、森口に関しては弱みになりそうなネタしか興味が無い。下の名前とかどうでもいいし。

スプーンを持ったまま、かおるさんに「はやく始めてくれ」と視線で訴えてみる。だが彼女は、森口をニコニコした顔で見つめたままでこちらに気づいてくれない。かおるさんから逃れるように、森口は視線を何故かあたしに向けた。

「マユミって」

なんだ、あたしの名前がどうかしたのか？

「佐藤の下の名前って、マユミ、なの？」

は？

こいつは何を言っているんだ。

「あたしは産まれて名付けられた日からずっと、佐藤 真由美だけど、それがどうかした？」

「いや、日浅がずっと『まゆちゃん』って呼んでたから」

「まさかあたしの名前が『佐藤 まゆ』だと思ってたの？」

こくり、と隣に座る森口が頷く。

おいおい嘘だろ、勘弁してくれよジョー。

はああ、とあたしは大きな溜め息を吐いた。いつもなら「何て奴だ！」と腹を立てていただろうけど、1年前からお世話になっている英語教師の名前すらあやふやなあたしが言えたことではない。とい

うかそれよりもパフェが溶ける、そっちの方が重要だ。

「まあ、あんたがあたしの下の名前を呼ぶ機会もないだろうし、どうでもいいよ。てか、かおるさんパフェ食べていいですか？」

その言葉でようやく彼女は自分の仕事を思いだしたようだ。

「ごめんね、忘れてて」と、ストップウォッチを取り出し、5、4、3、とカウントを始める。いよいよ対決のときだ。

「2、1、スタート!!」

飾られたバナナに強引にスプーンを突き刺し、自分の口へ運ぶ。こうして、あたしの挑戦は始まった。

●
●
●
●
●

友人である佐藤真由美の注文を店長に伝えてから、陽菜は慌ただしく働いていた。

部活終わりの学生たちが集まり、喫茶スペースは混雑している。そこをするりと通り抜け、陽菜は受けたばかりの注文を伝えるために厨房へ向かっていた。ケーキの注文ならお皿に出して運ぶだけなの

で陽菜にでもできるが、パフェやワッフルなどは頼まれる度に奥の厨房で作るため、言いに行かなければならない。

丸い窓のついた扉を押し開け厨房の中へ入ると、途端に甘い香りが一層強くなる。空腹に負けそうになりながらもなんとか注文を伝え、戻ろうとしたときだった。

「あっ！」

陽菜の踏み出した一步が、つるりと床を滑る。誰かがタイルに水をこぼして、その上に足をおもいつきり置いてしまったらしい、とのんきに考える暇はなく、陽菜の身体と床は急接近していた。ぎゅつと瞼を閉じ、痛みを感じる瞬間を無抵抗に待つ。

1秒、2秒、……5秒、10秒。どれほど待っただろうか。恐れているその時はなかなか来ない。不思議に思い、固く閉じた瞼をそつと持ち上げる。

「おい」

何故か、不機嫌そうな転校生と目が合った。

天海冬馬と名乗っていた彼は、上から陽菜を覗きこむような体勢でいる。しかも上下さかさまで。

「おい、いつまで倒れてんだよ」

つつけんどんな天海の言葉で、ようやく陽菜は状況を理解した。

上半身は床に届く前に支えられ、頭がタイルに直撃するような事態にはなっていないかったのだ。半分倒れかけている陽菜を助けてくれたのは、——間違いなくこの男。

慌てて立ち上がり、乱れたスカートを整える。それに続いて天海も立ち上がり、感謝を言葉にしようと陽菜は口を開いた。

「あ、ありが……」

「お前バカだろ。もうちょっと頭使って歩いたら？」

ばきん、と何かが割れる音がした。それは現実の音ではなく、陽菜の中で何かが割れる音だった。割れたものに名を与えたとしたら『謝意』だろうか。

ぐつと文句を飲み込んで、陽菜は厨房の扉から外へと飛び出す。

どんな文句も彼に弾かれてしまう気がしたのだ。だからといって黙ったままだった自分が許せない。何か一言でも言い返せばよかったのにと、悔しさでいっぱいになって陽菜は下を向いた。

そして、ふと気付く。

「あ、まだお礼言えてない……」

●
●
●
●
●

「うー、よーん、さーん、にー、いーち、はい終了!」

かおるさんのカウントダウンが終わると同時に、あたしは手に持つ

たスプーンを器に戻した。からん、という気持ちいい音がして、スプーンが器に身体を預けたまま天を仰ぐ。そう、そこにはスプーンしかない。つまり空っぽである。

「今回も頑張ったわね、マユミちゃん。でも困ったなーこのままじや儲からないわ」

他の商品いっぱい売れてるいいじゃないですか、と思うが言葉にはできない。喋ろうとすれば確実に口から出てしまう気がしたからだ。パフエが。

あたしはふうーと息を吐いて、お腹をさすった。

あらかじめスカートは緩めてある。そうでなければ今感じている苦しさはこんなものではなかっただろう。

「おつかれさま、佐藤」

優雅に笑う森口の手にはティーカップの取っ手。あたしが『あまみのチャレンジスペシャルパフエ』と格闘している間も、こいつは紅茶を飲みながら時々傍を通る陽菜を眼で追っていた。ああ腹立たしい。あたしだって甘い悪魔野郎と戦闘中じゃなかったら舐めるようにずっと見ていたのに。

森口に返事もせず、あたしはだらーっと椅子にもたれかかる。

口には甘い生クリームの味が残っていて、それを洗い流そうとお冷に手を伸ばした。ものすごく行儀の悪い格好になっているが、気にしていない。

一気に水を飲むと胃の中でパフエとかき混ぜられ酷いことになるので、度の強い酒を飲むようにちびちびと水を口の中に流し入れている。言っておくが、あたしは未成年であり、酒は飲んだことが無い。

「じゃあ、マユミちゃんのパフエはタダね。あとはごゆっくりどうぞ」

お盆の上に空になったガラスの器を乗せ、かおるさんは膝上のスカ

ートをひらめかせながら去って行った。

それにしてもかおるさんは何歳なんだろう。スカート下から覗く生足は、まだ『ぴちぴち』といっても問題ない綺麗な足だ。まあ一番綺麗なものは陽菜の生足だけだね。

「佐藤がそんなに甘い物好きだなんて知らなかったよ」

こちらをちらりと見て、森口が呟く。

何を勘違いしているのか知らないが、あたしは別に甘い物が好きってわけじゃない。

「そうでもないよ。パフェは頑張ればタダになるから食べてるだけ」「へえ、好きなのかと思った」

こんな感じで森口と中身の無い会話をしばらく続けた。最初の頃は無駄話をする気はなかったのだけれど、あまりの息苦しさ話すことで腹部の圧迫感を紛らわせるかもしれないと考えたのだ。

だが、それは余計にあたしを苛立たせるだけだった。

「どうしてオレは佐藤に嫌われてるのかな？」真顔で森口が変なことを言いだした。そんなこと言わなくても分かるだろお前。

「嫌いだから」

簡潔に答えれば、隣に座る優男の顔が引きつる。

良い顔だ。何だかすっきりした気分になるからずっとそのままの表情でいればいいのに。

そんなことを考えていると、森口はいつのまにか真顔に戻っていた。

「オレは佐藤こと好きなんだけどな」

がたんっ

あたしは椅子から立ち上がり、森口からできるだけ離れる。といっても、あたしたちの居る場所は窓際のテーブルで、後ろは壁だからあまり意味はなかったんだけどね。

ああやだやだ、これだから森口って男は本命以外にも好かれまくるのだ。あたしは嫌な気分にしかならなかったけど。

陽菜と森口の会話を邪魔するためとはいえ何故この席に座ってしまったのか、あたしは今になって後悔した。

「何で離れるの？」

「さっきも言っただけど、何となく」

あたしは椅子を元に戻しながら、とんでもないことを言いだした森口を見つめる。

そんな言葉をするって本命にも言えたなら、陽菜とこいつの関係はもっと違うものになっていたのかもしれない。

「あたしのことが好きって……友人として？」

この問いに、森口は当然だと頷く。

「陽菜は？」

「え？」

「陽菜のことは、どう思ってるの？」

その質問をした瞬間、森口の時間が止まった気がした。

いや、動かなくなったただけなんだけど、驚いた顔のまま何も言わない。少しして、話し出した森口の頬はほんのり赤くなっていた。

「佐藤はオレの気持ち知ってるんでしょ？」

「でも、あんたの口から聞きたい」

はつきり本人から聞いたことは一度もない。

陽菜と接する態度を見ていて、勝手にそう思っていただけだ。

だけど、あたしが森口からそれを聞いてどうなるのか。別に応援してやれるわけじゃないし、改めて敵だと認識して終わりになっってしまうだろう。そう、本当にこれは意味のない質問だ。陽菜を抜きにした、あたしには関係ないはずの話。

それでも聞いてしまったのは、満腹を超えてしまったあたしの気分
の悪さを紛らわすため。

「好きだよ。……すごく好きだ」

結果、あたしの気分はさらに悪くなった。

何だこいつ。今自分がどんな顔してるかわかってる？

大切な者を慈しむとんでもなく柔らかい表情。幸せに浸るそんな森口に、一瞬でも負けるかもしれないと感じてしまったあたし。いやいやいや、やらねーよ。陽菜は絶対に渡さねーよ。森口に負ける、つまり陽菜が奪われるイメージをちよつとでも浮かべてしまったあたしを殴りたい。違う違う、こんなつもりじゃなかったのに。

「う、うえ」

吐き気を抑えるために、あたしは手を口元に当てて森口から視線をそらす。目元には涙が滲み、それを悟られまいと慌てて上を向いた。
「佐藤！」

心配げに森口はあたしの背中をさする。やめてさわらないで、とは言えず大人しくしていると少しだけ苦しさは和らいだ。

「森口、もういいから。大丈夫」

「本当に？あまり無理はしないようにね」

あたしから手を離れた後も、不安げに森口はこちらを窺っている。きっとこいつはパフェを食べすぎたせいであたしが吐きそうになったと想像したのだろうけど、それは半分正解で半分不正解だ。

食べすぎと森口の真っ直ぐな思い。

この2つのせいで、あたしは肉体、精神にダメージを受けてしまった。気分は最悪だ。それらをどうにかするために、身体は何かを吐きだそうとしたのかもしれない。

あーあ、こんなこと聞くんじゃないかな、と思いつつも、森口にははつきり言っておくことにする。

「ねえ、森口」

「ん？」

「あたしはあんたの恋の応援なんてしないし、それよりも邪魔するし、正直陽菜には指一本触れてほしくないと思ってる」

「うん」

予想通りというか、森口はあたしの発言の後も穏やかな顔のままだった。余裕っぽいところがとてもム力つきます。

「陽菜の隣にあなたは相応しくないし、何よりあたしが嫌だし、あんたじゃなくても誰にも渡したくない」

「うん」

「つまり、そういうことだから。じゃあね」

あー、すっきりした。

財布とか携帯電話ぐらいしか入っていない鞆を持って、あたしは席を立った。まだ重く感じるお腹を労わりつつ、ゆっくりと出口に向

かう。だが、外に出ようとしてあたしは一番大事なことを思い出した。

「あー!!」

急いで戻ってきたあたしを見て森口は驚く。

「どうかしたの、忘れ物？」

そう、一番大事なものを忘れるところだったのだ。

「バイト終わりの陽菜と一緒に帰るんだよ。あんたが送り狼になっても困るしね」

そう、森口と決着つけるためにこの場にいたんじゃない。あたしは陽菜を中心にして動いているのだから。あたしの言葉に森口は困ったように笑って、また紅茶を飲んでいた。何杯飲んだこいつ。

夜でも爽やかなままの森口と、同じ席で同じ人を待ちながら、あたしは窓の外へ視線をやる。ああ、早く陽菜に会いたいな、このささくれ立ったあたしの心を癒してほしい。

そんなことしか考えていなかったあたしが、女の子の視線やシャッター音に気がつくはずもなく。こうして今日も一日が終わった。どんな明日がやってくるのか、今のあたしはまだ知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6328o/>

彼女の隣は渡さない！

2011年10月7日22時25分発行